

# 'δ κόσμος, αλλοίωσις' δ βίος, υπόληψις.'

78号 1994.1.30

文・編集・発行  
恋 怪子

## LIVE: THE STREET BEATS

1993. 12. 4 パワーステーション



ベースのICHIKAWAとドラムのSHOJIが脱退したあとの初めてライブ。この日OKIは「みんなに心配をかけただけ、こうやってライブができることになりました」といっただけで、それについては何も話さなかったが、DOLLのインタビューでは「生き方の違いとしか言えないな。やっぱりミュージシャンとしてね。俺は討ち死にするまでやれちゃうけど、そうじゃない人もいて、それを首根っこ捕まえてついて来させる訳にはいかないでしょう」と語っている。そして、正式なメンバーを探すのかという質問には「無理矢理、頭数揃える為ってのはない。今、いい状態だし」と答えている。確かにこの日のストリート・ビーツはいい状態であった。ベースとドラムがサポートとはいえ、のびやかで楽しくやっていた。OKIの歌には明るい寂しさといえるような深さを感じられたし、SEIZIのギターは最終力強く鳴り響いていた。新曲の「青の季節」では歌に匹敵するか、もしくはそれ以上に歌の世界を表現していた。

OKIは「1つの季節が過ぎた」と自らを語っている。それは、カントリー・ジョー・マクナルドのいう「怒り」から「悲しみ」への変化であるともいえるだろう。

「私は一カ月前か二カ月前、シェア・スタジアムで行われたある大平和集会で、演奏するためにバンドを連れてきていたジャニスと顔を合わせた。政治的なことに顔を出すのは彼女には珍しいことだった。でもそのとき、彼女は育っているなどと思った。彼女はヘベレケに酔っぱらって、すごく不機嫌だった。あれこれのことは、しょうがなかったんだとか、自分は観客やファンたちの奴隷だとか、それに彼らが望んでいたからこんな風に振舞ったとかいう典型的な酔っぱらいだった。

しかし私に対してはいつも正直だったように思える。そして彼女の怒りが悲しみに変わっていったのを発見した。彼女は本当に進歩しているようだった。というのは怒っているとき、人は、いつも自分以外は皆悪いと思うからだ。しかし結論に達したとき、自分の感じていることに対して誰にも責任がない、誰一人として責めることができない、誰にでも何かが起こり、それに対して好きなだけ償償せられるが、それは自分を苦しめるので、忘れてはならない。それから自分に直面して、自分が本当に不幸せだと認めなくてはならないと理解しはじめた。彼女はそれに直面しはじめていたと私は思う」

——カントリー・ジョー・マクナルド

## LETTER: from 浅見純子

ここにでは、BEATの音楽、その面白さ、そして、その魅力、そして、その面白さを、私は、この雑誌を通じて、読者の皆さんに、紹介したいと思います。そして、その面白さを、私は、この雑誌を通じて、読者の皆さんに、紹介したいと思います。そして、その面白さを、私は、この雑誌を通じて、読者の皆さんに、紹介したいと思います。

## INTERVIEW: OKI (DOLL 1994年 2月号より)

OKI「年齢の話が出たけど、このバンド始めて10年、17-18歳の頃から10年経つ訳で、以前だったらその年頃のリスナーと同じ視点でということまで共感があったと思うんだけど、もうその視点から書いてもしょうがないし、嘘になるし。やっぱりそういうの、いつまでも歌うって嘘つきだと思うよ」

▶思い出して歌うことはできるけど、だったら今を歌うべきだよな。

OKI「そう。俺は今、歌いたいことがあるから。必然的に、前は見えてなかったことが見えてきたりするし。逆に「青春」とか、凄いいカッコイイことだとなってしまうのわかる」

▶え、それは自分は過ぎてしまったから？

OKI「そうじゃないけど、1つの季節が過ぎたのはある。その時わからなかったことが今はわかって、それを照れずに歌える。だから凄いい青いことも歌えるんだよね。それは昔のことを思い出して書いてのとは違うんだよ」

▶「風が舞う日に」は、映画の「俺たちに明日はない」を思い出した。

OKI「うん。観たことあればシンクロできるし、観なくても聴けるよね」

▶あの映画の私の見方は、大人になることや男や女であることを拒否した子供の2人が、子供のままでは生きられないんだと、社会という大人に殺されてしまったかと思つたのね。大人になることが正しいかどうかは別にして、OKI「うーん、俺はね、あれは一つの生き方だから、最終2人が目が合って、こういう生き方しかできなかったけどOKIだったなって感じて。2人の生き方に否定はないよ」

▶私の方で考えてたから、この曲を最後にもってきたのは、OKIさんもある意味で子供の時に別れを告げたのかと。

OKI「いや、逆だな。後悔はしてないと思うよ、映画の2人も俺も討死にしても構わないうて思ってるから。うーん、人生の価値をさ、見出せなくて悩んだりするけど、人生の価値を探すと自分が人生の価値なんじゃないかって思うことが凄いいあってさ。1曲目の「I WANNA CHANGE」で変わりたいって言って、「風の舞う日に」も後悔してないって思っ、いつもここて終わってほしいって思ってた。凄いいね、利根的なことを歌いたくて、何故かと言うと利根的な気持ちだったからさ」

DOLLにストリート・ビーツのインタビューが載っていることを知らせしてくれた安田潤子さん、どうもありがとう。

## SONG: 風が舞う日に



八月になったら君を連れ出して  
陽炎のもえるハイウェイをどこまでもとぼそう  
君はバスケットにサンドイッチつめて  
俺はポケットに銃とワイン退っ手をふりきって

ありふれた毎日に風穴をあけたくて  
その思いがすべてだった今がすべてだった

若さをおそれる臆病な弾丸はアウトサイダーたちをいつも標的にしようとする  
一瞬の風が舞う日にすべてが終わり何がはじけた  
一瞬の風が舞う日に短い夏の終わりを知った  
風が舞う日に風が舞う日に

(歌詞はこの日に録音したテープを聞いて書いたので、正式歌詞とはちがっているとします)

12月4日のパワーステーションのライブは横道坊主の中村と一緒にやった「世界一悲しい街」で始まったが、この12月12日と1月9日の弾き語りも「世界一悲しい街」だった。バンドではめったにやらない曲で、いつも聴きたいと思っていた。身が引き締まる思いで聴いた。

浅見さんは OKIをまつすぐにうけて、それをまつすぐに表現している。そうさせるものが OKIにはある。そして、多分 OKIは、こういうファンからまつすぐに放射されるものをまつすぐにうけておめていると思う。

photo by K.K